

## ヨーロッパ諸国の博物館視察（1）

著者	大給 近達
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	1
ページ	177-180
発行年	1976-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00004666">http://doi.org/10.15021/00004666</a>

## ヨーロッパ諸国の博物館視察

### (1)

大 給 近 達\*

1975年の3月初旬に、イタリアのミラノをふりだしに、チェコスロバキア、オランダ、スウェーデン、メキシコの順路で、民族学関係の博物館を約20日間の日程で視察してきた。

国立民族学博物館は1977年の秋に、開館を予定されているので、その間に、本館の情報処理と情報提供の業務に必要な施設や運用に参考となる事項を含めて、ヨーロッパの博物館における情報システムを広く見てくることが、今回の視察の目的であった。すでに、フランス、西ドイツを中心として、1973年、本館の佐々木教授が視察に廻られているので、今回は対象から除くことにした。

#### イタリア ミラノ

スフォルツェスコ先史・民族学博物館 (Museo archeologico, etnografico) 一口に、ヨーロッパの民族学博物館といっても、各国の伝統のちがいによって、博物館の性格は異ってくる。今回の最初に訪れたミラノのスフォルツェスコ博物館は、地方都市にある国営博物館の一例と

して関心があった。

この博物館は、15世紀に建てられた大城塞が、後に複合博物館に転用されたもので、組織として独立した美術館、音楽館、民俗館が、同じ城塞の中に同居している。

現在博物館は国の補助金で運営されているが、近年のイタリア経済が財政難に直面しているため、人員削減がなされた結果先史・民族学館は、わずか3名の専門職がいるにすぎない。展示場にも案内や守衛がおらず無人の博物館という印象であった。

展示品は、19世紀以来収集してきたエジプト資料が特に優れていたが、アフリカ、アメリカ原住民の資料も地方都市のコレクションとしては豊富にあった。ほかにイタリアの先史期の石器・土器やローマ時代の生活用具など資料としては5000点近くが展示されている。しかし、城塞の建造物をそのまま利用している関係で、新しい映像・音響を用いた施設を導入することも出来ず、展示施設も伝統的なガラスケース中心のものであった。

標本の配列や説明内容も、わが国の東京国立博物館と似ており、「文化をわからせる」ことより「見せる」ことに主眼が置かれている。展示品に関する案内書は、複合博物館の中で、ここの先史・民族学館だけ用意されていない。キュレーターの説明では、補助金が少ないことと入場料が無料であるため情動的サービスが出来ない状況であるということであった。しかし、このことは、館の利用率を低めることになり悪循環を繰返すことに

\* 国立民族学博物館第4研究部

なろう。ちなみに、博物館の利用者を見ていると、来館者の過半数は小・中学生である。展示の説明が不十分なために、引率してきた教師がミュージアム・ティーチャーの役をつとめている。教師の一人は、わたしに「ここで博学になることは結構だが、自分は博学でないので生徒に尋ねられても半分は判らない」と笑っていた。生徒を除けば多くは、ローマ時代の生活用具のデザインを模写している工芸家やデザイナーが多いのに驚かされる。この人達にとっては、資料の造形的関心が主なので、説明パネルには不満をもっていない。一般の来館者はエジプトのミイラとローマの生活用具のコーナーに立ちどまる位で、あとは素通りであった。この展示を見た感想は、趣味の変わった「古美術店」のショーウィンドーをのぞいた感じが強かった。いっそのこと、標本資料に時価の値段でもついていたらもっと面白いのではないかと考えてしまうのは、博物館として必要な「情報」が余りにも不足しているからである。

この博物館では、収蔵品の9割が展示されており、破損品だけが倉庫に収められていた。収蔵品に関する詳細な資料は、先史、歴史、民族の専門職であるキュレーターが、今までの経験に基づいて記憶されている以外、カード類への蓄積はなされていなかった。この点では、わが国の個人経営で行われている郷土館や民族資料館と本質的に異っていないように思えた。

先史・民族学博物館と並んで、城塞の一角にある音楽館は、世界諸民族の楽器、ヨーロッパの伝統的銘器であるバイオリン、チェロ、ピアノなどが大量のコ

レクションとして展示されている。ここでは、これらのコレクションに関する誠に充実した写真集と解説書が豊富に刊行されている。説明を求めればキュレーター自身が展示場に出向いて来館者の応接を行っている。補助金の額も前の先史・民族学博物館より、高額であるということであるが、情報サービスはキュレーターの人柄による所が大きいと所員は説明してくれた。

#### イタリア ローマ

#### 国立先史・民族学博物館（ルイジ・ピゴリーニ博物館）

(Museo nazionale preistorico ed etnografico luigi pigorini) 現在博物館展示場はローマの南端部にあるエウル（ローマ万国博会場）に移転し、研究機関は、まだローマ市内の旧館に残っている。

エウルにある展示場は、東洋美術博物館 (Museo L'arte orientale) と同じ建造物の中にあり、まだ一部未完成のまま開館していた。

ネオクラシック様式にまとめられた宮殿風の展示場は、第二次大戦直前に万国博覧会会場の一部として建設されたものであった。そのため展示コーナーは大理石で作られた広大な広間で構成されているが、反面に、この建造物が最近の展示設備に大きな障害となっていた。館長の説明によれば一見壮大な宮殿は博物館にとって大きなお荷物となっているということであった。雨もりの修復のためにアメリカ館は閉鎖されており、他の展示場も直射日光を除ける遮光設備を設置するため、展示のスペースを大幅に縮小せざるを得ない現状であった。この博物館で最も優れているのは、展示ガラスケース

のユニットである。ケースの大きさは、大中小の3種あるが、内部に棚、懸架枠が自由に展示品に合せて調整出来るように各種のユニット部品が用意されている。しかし、展示場の大部分は、このようなガラスケースで構成されているため、来館者にとっては大変親しみにくいものであった。

標本資料に関する情報サービスは、目下研究機関が離れているため、来館者の希望にそうごとが困難である。先史学関係の鑑定と修理は、館長がペルー先史学の研究者でもあるため、展示場の一部を研究施設に充当させ、研究者を交代で出向させていた。だが台帳カード類はローマ市の旧館に保管されているので、外部の研究者にとっては十分な便宜が計れない状態である。

展示解説書やカタログなどは、いま創設期のため作成中とのことであった。

館長のマルコニー女史は研究こそが博物館のエネルギーであるので、当面研究活動に主力を置くことを力説し、安易な解説書より紀要を将来は利用してもらう方針だと話してくれた。標本資料の整理カードは、館長の方針にしたがい、専ら研究者個人の研究用に作成されており、公共的業務として蓄積には関心が払われていないことは問題をあとに残すように思われた。

**チェコスロバキア プラーハ  
国立ナプルステック アジア、アフリカ、アメリカ博物館  
(Náprstek museum asijských, afrických a amerických)** プラーハの中街に近く、古い煉瓦で建てられた民族学博物館を訪れた。この博物館は、はじめ

個人のコレクションから発足したので、今でも通称ナプルステック博物館と呼ばれている。

博物館に収蔵されている民族学関係の資料は、20万点を越えており、収蔵庫も資料の収納が限界に達する状況であった。しかし、収集活動も活発に続けられ、訪問した日には東南アジア地域から数百点のコレクションが到着していた。収集活動は現地購入のほか、コレクション交換によって行われている。

博物館の建物が老朽化しているため、大型の標本資料を中心とする展示は、他所の宮殿を利用することが計画されている。現在の展示もスペースが充分でないため、収蔵展示に近い。この博物館は地域別、専門別にキュレーターがそろっているため、専門的知識を得たい時は何時でも部屋を訪問して、自由に尋ねることが出来る。キュレーターは各専門に経験が深く、標本に関する知識も生き字引のように豊富な事例を引きながら、説明をしてくれる。だがこの専門的な知識は研究者の個人に負うことが多く、共通の知識として蓄積する手段に対し、余り重要視されていない。そのため、一般市民に対する啓蒙的解説書が、特別展示を除けば、博物館業務として組入れられていない。研究者は自分の専攻する研究分野(例えば古代インド史、日本美術など)とその研究分野を包括する地域全般の民族資料に通じていることが基本条件になっている。各地域のキュレーターの部屋を訪れると、部屋の装飾から日常の飲物まで、専攻地域の文化によって特色を出していたことは興味深かった。わたしには、ここのキュレーター達が外国のそれ

ぞれの専攻地域の文化にほれた仕事をしているという実感が強く感じられた。たとえば日本部のボハーチュバー博士のところでは、最近送ってきた煎茶を日本の急須や茶碗でご馳走になり、西アジア部では、トルココーヒーをやはりトルコの用具で接待されて驚かされた。

どのキュレーターに会った時も、話は収集に移り、将来わが博物館と何等かの方法で資料の交換を望む希望が強かった。ナプルスティク博物館で欲しがって

る資料は、台湾、韓国、フィリピン、アイヌ民族関係のもので、交換として提供出来る資料はチリーのオナ、インドネシア、北アフリカ関係が可能であるということであった。そのほか、チェコスロバキアの各地方の民族服、酪農用具、年中行事や婚礼、葬式の記録映画、民族音楽テープなども必要であれば購入の便宜を計ってもよいという好意のある話も聞くことができた。